広報まえばし

2018.12.15

前橋の人口：33万7,623人
男：16万5,258人
女：17万2,386人
世帯数：14万8,713世帯
11月末日現在

おいでー!!

みんなでまちなかを楽しもう。

MAEBASHI PR_NO.1618

で切り拓く
まちなか

前橋の「まちなか」はどんなところ？
そう聞かれたら、皆さんは
どんなイメージを抱きますか。
かつて中心商店街として
買い物客でにぎわったまちなか。
昔、前橋といえばここをイメージする
人が多く、楽しい思い出が詰まった
場所として記憶に残る人も
いるのではないでしょうか。
しかし、ここ最近は
閑散としている、人通りが少ない…
そんなイメージを持つ人が

撮影 平山 利男

新たな価値

私たちの

多いかもしれません。
今ではシャッター街と呼ばれることが
多くなってしまったまちなか。
しかし今、このまちなかが
生まれ変わり始めているのを
知っていますか。
「まちなかを未来につなぎたい」
その思いが、行政、民間などの
垣根を越えて動き出しています。
まちなかに、新たな価値を。
未来につなぐ挑戦が始まります。

問 市政発信課
☎027-898-6642

撮影 平山 利男

買い物客でにぎわったあの頃

前橋の商業の中心地

「中心市街地＝まちなか」は、戦後間もなく活気を取り戻しにぎわいを見せていた場所でした。今も続く前橋まつりは、戦後の復興祭として当初からまちなかを中心に開催されてきました。そして高度経済成長期を迎えるとまちなかはさらに活発化。前三百貨店やスズラン、西友などの大型店舗が次々と開店し、商業の中心地として、多くの人々が買い物を楽しむ場になっていきました。

撮影 平山 利男

まちなかは当時の最先端

西友LIVIN前橋店
元婦人服課長
井上 厚さん

昭和50年のオープンと同時に西友（後の前橋西武）で働き始めました。後にオープンしたWALK館は若者向けのショップが売りで、10代20代から圧倒的な支持がありました。まちなかにも話題性のある店が多く、周辺に高校があったこともあり、大変にぎわっていました。馬場川通りにタレントショップがあり、百貨店には県内初のお店が入り、当時の最先端を行く場所だったのではないでしょうか。その後、バブル崩壊や郊外型店舗の増加で衰退が進んでしまいました。まちなかは私を含め、たくさんの人が楽しんだ場所だと思います。昔のように、自然と人が向かうような場所になったらいいなと思います。

戦前の前橋名物の一つだった立川町のすずらん灯。戦中には中止しましたが、昭和22年に戦後初の街灯として復活。写真は弁天通り。銀座通りなどにも設置されました。

昭和37年、中央通りにあった店舗「赤かんばん」に前橋で初めてエスカレーターが設置されました。上り一本でしたが、エスカレーター目当てに連日多くの人でにぎわいました。

昭和39年、現在の前橋テルサの場所に県下初の百貨店として前三百貨店が開店。完成した当時は県内一の高層ビルでした。最上階には天望レストランがありました。

昭和37年に、県下初の全蓋アーケードである中央通りアーケードが完成。車の通行を禁止して買い物客の安全を優先した商店街の形は、全国でも先駆け的な存在でした。

弁天通りのアーケードは昭和43年に完成。これを機に約半数の店舗が新築し、大型百貨店に対抗した歩行者のための新しい商店街「横のデパート」が誕生しました。

前橋商工会議所 創立百周年記念誌「夢 出会い 前橋」より

時代で変わる商業の中心地

しかし、時代とともにまちなかを訪れる人は減少。高校の郊外移転も拍車をかけました。それに伴い、多くの店舗が閉店。郊外への大型店舗の出店や通信販売の定着などが影響していると考えられています。

2年前に実施した市民アンケートでは、回答者約3，000人のうち、まちなかにぎわいを感じない人の割合は約9割。身近なところで用が足りることや買い物をする店舗が少ないことなどを理由に、ほとんど行かないという人が多い結果でした。

その一方でまちなかに活気があることは重要と答えた人も約8割いました。多くの人がにぎわいを望んでいるのです。

時代とともに変わる商業の中心地。衰退が進んだまちなかに再びにぎわいを取り戻す、新たな挑戦が始まります。

まちなかに再びにぎわいを

キーワードは 新たな価値の創造

多くの人がにぎわいを望んでいるのに、まちなかに行く人は少ない…。このギャップを埋めるにはどうしたら良いのか。

まちなかの衰退が問題視され始めてから、この現状をどうにかしなければならないと、行政やまちの人々は長年にわたりさまざまなことに取り組んできました。

これまでまちなかの人々はにぎわいづくりや活性化を目指し、さまざまな取り組みを実施。諦めずに再生への機運を高めてきました。

一方、本市では総合計画などで、中心市街地の活性化を市全体の重点事業に位置付けると共に、中心市街地活性化基本計画を策定し、大型店舗の跡地利用などの具体的な施策を模索してきました。そして、前橋プラザ元気21やアーツ前橋の整備などが進んでいます。

また、中心市街地活性化基本計画策定の中で浮かび上がったキーワードが、「新たな価値の創造」。今までまちなかに来る人の目的は買い物が中心でした。しかし、商環境の変化により、中心部には市民の誇り創出も期待されています。

再びたくさんの人に訪れてもらえるような場所にするためには、買い物をする以外に「まちなかに行きたい」と思わせる、新たな価値を創り出すことが必要だと方向付けました。そのためには、行政のみならず、民間や市民と一緒に取り組んでいくことが必要です。そこで、それぞれが同じ目標に向かって取り組めるよう、活性化基本計画の中でまちづくりの基本方針を設定。まちの文化芸術交流、職住近接性、経済活力、デザイン力の4つを高めることにしました。

この方向性を踏まえ、土地の利活用や道路の整備、空間デザイン、出店支援など、さまざまな面でまちなかに新たな価値を創り出す取り組みを進めています。

まちなかの印象を聞きました

こども図書館を訪れていた**神村 久美子**さん
三俣町三丁目

前橋のまちなかは子育ての環境が充実していますよね。特に前橋プラザ元気21は利用者が多いのでここを拠点に活気が出ればいいなと思っています。

群馬医療福祉大4年 **松本 和興**さん
表町一丁目

大学がまちなかにあるので、ランチを食べによく出掛けます。ここ最近は新しいお店がオープンしているので気になっています。もっと若い人も入りやすい店が増えたらいいなと思います。

買い物で訪れていた**佐藤 ますみ**さん
亀里町

昔からまちなかに来ることが多く今も買い物に来ますが、昔に比べるとお店が閉まっていて寂しい感じがします。昔のようにもう少しお店が増えるといいですね。

中心部らしい場所に

千代田町二丁目
自治会長
飯塚 伸彦さん

町内を中心に再開発の検討が行われていますが、一番の課題はいかに前橋にフィットしたものとすることができるか。整備して終わりではありません。ここに市民は何を求めているのかをしっかり把握し、前橋の中心部らしい場所になれば。昔のまちなかは迷子になるほどの人だかりで、デパートで買い物を楽しんだり、大きなテレビをみんなで見たり、楽しかった思い出があります。そんなワクワクできるような場所になってほしいですね。

頑張る人を応援したい

まちづくり公社
まちづくり部長
岡村 政幸さん

まちづくり公社では中央イベント広場や前橋テルサ、駐車場などの施設管理、イベント主催者への支援をしています。今までは施設管理が主な業務でしたが、今後は情報発信やイベント開催、まちなかの環境整備など、まちづくりの業務に直接関わっていくことを目指しています。私たちが特に大切にしているのは、イベント主催者のやる気と熱意を支えること。イベントの度に見えてくる反省点を改善しながら、頑張る人を支えていきたいです。

にぎわい創出をサポート

にぎわい商業課
高橋 俊紀

にぎわい商業課では、空き店舗の利活用を考えている人向けに改修費用の一部助成をしています。また、既に事業を行っている人にも改修費用の一部助成を行っています。本年度は、昨年を上回るペースでまちなかへの出店に関する相談が寄せられています。窓口では、「最近まちなかに動きが出てきたね」と期待の声を伝えてくれる人も増えてきました。まちなかでチャレンジしたいと考えている人はぜひ気軽に相談してください。

まちなかに現る 新たな価値の創造者たち

共有で広がる 新たな価値創造への高まり

本市が第七次総合計画で目指すまちの姿、新しい価値の創造都市。新しい価値は、今まであったものに知恵を加えることで生まれます。

今まで行政が進めていたまちなか再生への取り組み。行政だけでは広がらないものが多くあり、動きが見えにくいのが現状でした。しかし、「まちなかをどうにかしなければならない」という思いがさまざまな人たちに改めて共有されたことで、新たな価値の創造者たちが続々と現れます。

そしてここ数年で、人との出会いやまちなかでの時間を楽しむイベントが開催されたり、アートを楽しむ場になったり、まちなかの新しい役割が増えてきています。

10月と11月にはアーツ前橋開館5周年を記念して、前橋中心商店街協同組合とアーツ前橋が協力して企画展「つまずく石の縁 地域に生まれるアートの現場」を開催しました。過去にまちなかで滞在制作を行ったアーティストが、商店街の店舗などを会場に作品を展示。まちなかが作品展示の舞台となり、新たな価値を生み出したイベントになりました。

まちなかを流れる広瀬川を使ったリバーフェス。新たなスポーツイベントになった。

商店街×アーツ前橋で 生み出すつながり

アーツ前橋の開館5周年を一緒に祝いたいという商店街からの提案から開催した「つまずく石の縁」。これは市立美術館があり、アーティストとの交流に前向きな前橋のまちなかだからできたことだと自負しています。イベント開催中は、以前まちなかに滞在していた国内外のアーティストと再び交流できたり、多くの学生スタッフが参加してくれたりしました。訪れた人はここのアットホームな空気を好きになってまた来てくれるんですよ。互いのコミュニティが混ざり合い広がり、新たなつながりや価値を生み出していると感じましたね。お互いの存在を大切にしてきたから、気軽に相談できる距離感でいられるのもうれしいです。今後も一緒に面白いことをやっていきましょう。

(右)前橋中央通り商店街振興組合理事長 **大橋 慶人**さん
(左)アーツ前橋 **堺 大輔**

アーティストがまちなかで作品を紹介

じぶんカンパニー代表取締役・
プライベートジムDROIT代表
池田 道成さん

まちなかでやるから面白い

まちなかでプライベートジムを運営しています。ここでは、お客さんの体だけでなくその人の性格も徹底的に調べあげて、それぞれに合ったプログラムを作っています。まちなかには駐車場がないから人が来ない、と言う人もいますがそんなことはなくて。強い目的意識があれば来ると思うんです。このジムはまちなかでやっていることもあって、面白いねと注目してもらえているんだと思います。まちなかはみんなで何とかしようとしている場所。10年後、20年後のまちなかが楽しみですね。

まちなかで子どもに夢を

小さい頃に自転車でよくまちなかに遊びに来ました。昔あったおもちゃ屋さんのレーシングカーでよく遊んでいて、いつもまちなかに来るのが楽しみで仕方なかったです。今の子どもたちにも、私みたいに楽しい思い出を作ってもらいたい、まちなかで夢を見せてあげたい。そんな思いでおもちゃと人形自動車博物館の別館を作りました。「不思議な店があるんだな」と興味を持ってもらえれば、それだけでうれしいですね。いつかまた、昔のように多くの人でにぎわうまちなかになったらいいなと思います。

伊香保おもちゃと人形自動車博物館代表取締役
横田 正弘さん

前橋まちなかエージェンシー（MMA）代表
橋本 薫さん

私たちにしかできないことで　新たな価値を

まちなかは、前橋の人々の思い出が詰まった「前橋の顔」ではないでしょうか。小学生は鼓笛を披露したり、学校終わりに祭りに行ったり。そんな大切な場所がなくなってしまったら寂しいじゃないですか。だから私はまちなか文化を次代に引き継ぐために活動をしています。

私たちのビジョンは「デザインの力で、前橋のまちなかから日本の地方をもっと面白くする」。今まで行政に頼っていてどこか他人事になっていたまちなかのことですが、私たち市民にしかできない、やるべきことがある。これまで忘れかけていた価値と新たな価値を、訪れる人たちの生活に落とし込むのが、私たちの役目だと思っています。

買い物だけでなく、コミュニティへの参加や人との出会い、趣味、アートなどを楽しむ場に。彼らの挑戦によって、まちなかがそんな場に生まれ変わり始めています。

1 おもちゃと人形自動車博物館前橋別館。まちなかの3カ所に展開。

2 前橋まちなかエージェンシーの活動拠点、comm。シェアオフィスとして利用できる。

3 池田さんのジムは、既にまちなかに2つの店舗を出店している。